ISSN 1880-585X

sendai-city chronicles communication paper.

せんだい 市史通信

第29号
仙台市博物館
市史編さん室

上:明治20年に清水小路に完成した東華学校校舎(「仙台一中、一高百年史」より)
明治25年の閉校後、校舎や職員、生徒は新設の宮城県尋常中学校に引き継がれた。尋常中学校は幾度か移転、また校名を改称し、旧制仙台第一中学校の時に元茶畑へ移転。昭和23年に仙台第一高等学校となった

富田鉄之助
(真福寺蔵)

右:仙台二華中学校高等学校の二華会館(同窓会館)
仙台二華中学校高等学校の前身東華女学校は、尋常中学校移転後の東華学校跡地で明治37年に開校した。現在は連坊に移転しているが、二華会館の玄関には東華学校の標語「SEEK TRUTH AND DO GOOD(真理を探究し、善を成せ)」が掲げられている

せんだい 今昔
富田鉄之助と東華学校

「明治18年12月14日　夜、新島襄が訪ねて来て、仙台に学校を建てる計画を相談された」

この日記に書かれた新島襄は、同志社英学校(現在の同志社大学)を創設した教育家。日記の主は、薩長藩閥の強い当時にあって、仙台藩出身ながら日本銀行副総裁という要職に就いていた富田鉄之助です。

富田は天保6年(1835)、仙台藩の重臣の家に生まれました。幼い頃から頭脳明晰で、22歳の時に西洋砲術を学べとの藩命を受けて江戸へ上り、さらには勝海舟の塾に入って第一の門弟と呼ばれるまでになります。そして慶応3年(1867)には藩費でアメリカへ留学。仙台藩の将来を担う人材として、大きな期待をかけられた人物だったのです。

しかし富田の渡米後まもなく、日本では幕府が大政を奉還し、ついで戊辰戦争が勃発。故郷を案じた富田は慶応4年に独断で帰国しますが、恩師の勝は「帰国したのは浅はかだ。君を留学させたのは、人材が乏しいのを補うためなのだから」と叱責します。富田は勝に留学費を用立ててもらい再び渡米。以後明治7年(1874)までの滞米中に知り合った森有礼や伊藤博文らから才能を認められたのを機に、藩閥を越えて明治政府の外交や財政の要職に用いられました。明治15年には設立されたばかりの日本銀行の副総裁に就任して日本経済の近代化を主導。日本銀行第二代総裁となるも、一年にしてその職を辞した後は東京府知事に任命され、東京の衛生行政に力を注ぎました。勝の叱責に後押しされたアメリカ留学が、その後の富田に大きな花を咲かせたといえるでしょう。

さて、新島との出会いも、この留学中だったと考えられますが、二人のやり取りが富田の日記にはっきりとでてくるのは、明治11年以降です。同志社英学校の運営について新島に度々相談を持ちかけられては、外国人教師の雇入れや資金面での便宜をはかっている様子がみえ、富田の面倒見の良さがうかがえます。そんな富田に新島は明治18年、仙台での学校設立計画を相談してきたのでした。富田は率先してこの計画に尽力します。そして翌年、宮城の中等教育の任を果たす学校として、宮城英学校が仙台に開校されました。

富田自身も教育、つまり人材の育成に強い思いを抱いていたようです。宮城英学校設立以前には、在京仙台藩出身者の有志によって結成された郷土支援会「同求社」の中心メンバーとして、同郷の学生を対象とする奨学育英団体の立ち上げにも携わっていました。人材の育成が大事だという勝の教えが、富田のなかで深く根付いていたのでしょう。

宮城英学校は明治20年に東華学校と改称されました。万葉歌人大伴家持が詠んだ「天皇の御代栄えんと東なる　みちのく山に黄金華さく」にちなんだ校名です。それからわずか五年後に、さまざまな要因から閉校しますが、その伝統は仙台の学校に引き継がれ、東北の地に黄金の華(優秀な人材)を咲かせようとの願い通り、多くの人材を今も輩出しています。

歩いて実感 仙台の歴史 ――『仙台市史 特別編9 地域誌』さきどり企画

せんだい地域誌さんぽ その2

～七北田・根白石編～

泉区誕生時（平成元）の人口は約14万人。
それが現在（平成25）、約21万人にも増加しています。
新しい住人が闊歩する新しい街並み。
でもその足元には、永々と続いてきた歴史を覗ける場所があります。

※地図中の📷は、写真を撮影した位置です。

1 曲がってないのに曲がる道 七北田宿

江戸時代の奥州街道七北田宿付近は、現在でも七北田橋から市名坂、七北田へかけて、当時とほぼ同じ道筋に道路が走っています。真っすぐ延びる道の両側に、間口が狭く奥行きが長い家の敷地が並ぶ様子は、古い建物はなくても、宿場町の雰囲気をよく伝えています。ところが、『仙台領奥州街道絵図』に描かれた七北田宿は、中央付近が大きく曲がっているように見えます。このカーブは何を表しているのでしょうか？

描かれたカーブ付近を実際に歩くと、南側の善正寺から北側の浄満寺方向に向かった場合、ずっと上り坂が続きます。さらにカーブのもっともふくらんだ部分と思われる地点では、現在の道路面と、江戸時代の地面と思われる家屋が建っている面とに、約3メートル以上も高さが違う場所があるのです。この落差は自動車が通りやすいように道路を整備する際に、地面を削って勾配を緩めたことよってできたものと考えられます。これほどの落差があるということは、かつてはかなりの急坂だったのでしょう。

絵図で曲がり道に見えた部分が急坂の表現だとわかると、道の中に描かれている、数本の短い横線が段差を表したものだったのかと気づきます。江戸時代の人が実際の景色を伝えようとしてくれていたのに、現地を歩いてみなければ、錯覚したままになるところでした。

『仙台領奥州街道絵図』に描かれた七北田宿　江戸時代中期　（仙台市博物館蔵）
この絵図は、第6代仙台藩主伊達宗村の正室、利根姫に献上されたものの下書きと考えられる。藩主の正室は通常、一度も国元を見ずに江戸屋敷で過ごすので、この絵図を見て、領国の様子をあれこれ楽しんだかもしれない

2 空き地にそびえる白亜の建物 泉区役所

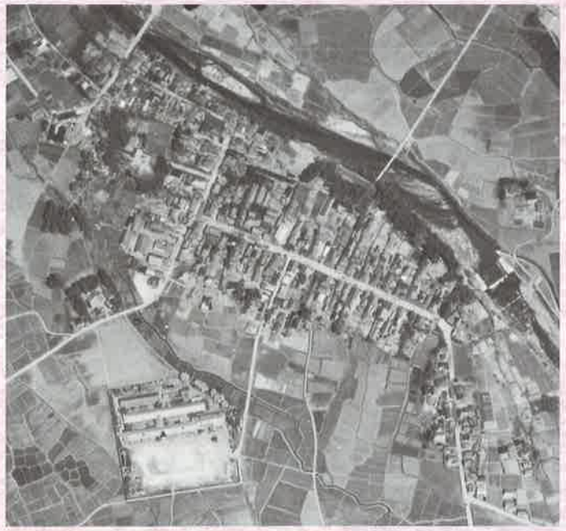
土の色も新しい、広大な空き地の向こうにポツンと見える白亜の建物。どこかで見たことがあるような・・・。そう、現在の泉区役所です。

写真は昭和57年(1982)2月に撮影されたものですが、この建物が当時の泉市役所として完成したのは昭和52年のこと。市役所を中心に新しい市街地を作ろうと周辺の土地区画整理事業が計画されてはいましたが、100ヘクタール以上にもなる周辺地域の工事が始まったのは昭和56年からでした。その間、この市役所は、空き地の真ん中に建っていたのです。その後、泉市は昭和63年に仙台市と合併して庁舎は泉総合支所となりました。そして翌平成元年、仙台市が政令指定都市となって区制が施行され、泉区役所となったのです。

泉市役所を望む　昭和57年2月撮影（個人蔵）

右下の写真は右上の写真とほぼ同じ位置から撮影したものですが、空き地はすっかりなくなり、立て込んだ建物の間に泉区役所の姿が見えます。庁舎の完成当時、いったいどれくらいの人がこの光景を予想したでしょうか。

自分たちが見ているものが、いつか歴史として記録されることがあるということは、普段は意識しにくいかも知れませんが、この景観の変化は確実にまちの歴史といえるでしょう。



根白石の町並み　昭和36年撮影（国土地理院蔵）

3 江戸時代初期の計画都市 根白石

江戸時代の宿場町は、ほぼ直線の街道沿いに人工的に整えられた、いわば計画都市ということができます。ところが、江戸時代を通して仙台藩の宿場だったという記録が残っていない根白石は、宿場のような景観を現在も保っています。なぜなのでしょうか？

昭和36年（1961）の航空写真では、根白石は、七北田宿と同様、直線的な道路の両脇にほぼ同じ間口で奥行きの長い屋敷地があり、さらにかぎ型に折れて道が北へ続いているのがわかります。この道は、実は江戸時代初期から変わらない街道のようすを伝えているのです。

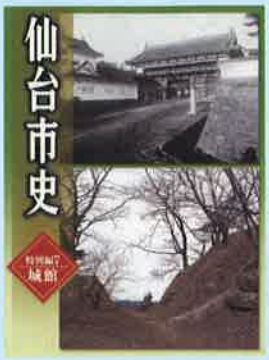
根白石は、付近を流れる七北田川の対岸に、戦国時代にあった白石城の城下的な集落として成立したと考えられます。また、仙台城下より北の奥州街道が、七北田から富谷に抜けるルートに整えられる元和9年（1623）以前には、朴沢から宮床へ抜ける中心的な街道に沿った宿場だった可能性があり、現在でも「上ノ宿」という地名が残っています。根白石の町並みはその頃に形成され、現在も変わらない姿を見せてくれていると考えられるのです。

初代仙台藩主の伊達政宗をはじめ、代々の仙台藩主が狩りなどに通った根白石への道。藩主たちと同じ道を辿れる場所が、ここにもありました。

ピックアップ 仙台市史 ●●●●●

特別編7 城館

B5判 オールカラー 624頁
6,000円（本体5,715円）



城跡を歩こう

相変わらず続く歴史ブーム。その一つの分野に城があります。高い天守や櫓、城門などの建築、石垣や堀といった防御施設をもつ城は、史跡としてだけでなく、観光地としても高い人気を誇り、多くの人に親しまれています。

しかし、櫓や石垣をもつような江戸時代の城郭は、日本の城の中では少数派で、その数は多く見ても300程度。天守が存在した城はもっと少なく、100もありません。

多数派は、全国で数万とも言われている戦国時代の城館なのです。ほとんどの場合、石垣はなく、土を掘って堀や土塁を築き、あるいは山の斜面を削って平坦部分（曲輪）や急斜面（切岸）が造成されています。建物は地面に穴を掘って柱を据えるために長持ちせず、現存しているものはありません。江戸時代の城を見慣れている目からすると「どこが城なのか」と感じるような地味さですが、実際に現地を訪れ、かつての遺構に挑んでみると、その防御の工夫や厳しさには驚かされるものがあります。

こうした城館が仙台市内には約70カ所確認されています。なかには開発で全くその姿を失ったものもありますし、存在は知られていても現在地が不明な所もあります。一方では、岩切城（宮城野区岩切、利府町）や松森城（泉区松森）、長命館（泉区加茂）、白石城（泉区根白石）、楯山城（太白区秋保町長袋）のように保存状態がよく、桜が植えられ、公園として整備されている城も幾つかあります。中でも岩切城は、南北朝時代から戦国時代にかけての山城の典型として、国史跡に指定されています。

『特別編7 城館』では、市内に存在するこれら城館を、江戸時代に築かれた仙台城などとともに取り上げました。それぞれの城館の歴史や遺構の状況を、図面や写真などを用いながら、コンパクトにまとめています。

寒い冬の間、『城館』のページをめくって予習をし、暖かい春になったら、お花見がてら城跡を歩いて、仙台の戦国時代に思いを馳せてみませんか。

岩切城跡　西から南に続く曲輪群

「野初絵図」（宮城県図書館蔵）に描かれた岩切城周辺

目次

第一部　市内の中世城館
Ⅰ留守領
岩切城・洞ノ口遺跡・小鶴城　ほか三カ所
Ⅱ国分領東部
南目館・南小泉遺跡・荒井館　ほか四カ所
Ⅲ国分領西部
杭城館・福岡館・白石城・福沢城・小岳館・八乙女館・山野内館・長命館・松森城・笹森城・熊ケ根城・御殿館・本郷館・郷六城・葛岡城・千代城　ほか一五カ所
Ⅳ北目領
北目城・沖野城・日辺館・今泉城・富沢館　ほか六カ所
Ⅴ秋保・茂庭領
館山城・豊後館・楯山城・長楯城・境野平城・境野山城・根添館・けんとう城　ほか八カ所
第二部　仙台城と近世城館
Ⅰ仙台城
Ⅱその他の近世城館
若林城・西館など
第三部　城館関係文献史料
Ⅰ中世城館関係史料
Ⅱ近世城館関係史料
◎付録絵図
1奥州仙台城絵図
2仙台城下絵図（寛文四年）
3仙台城絵図
4奥州仙台城并城下絵図
5仙台城普請窺絵図（享保六年）
6仙台城旧御本丸御屋形図
7文化元年御造営御絵図写

仙台の歴史を掘り下げる
「仙台市史」好評発売中！

通史編　1原始※改訂版とセット販売になります　2古代中世　3近世1　4近世2　5近世3　6近代1　7近代2　8現代1
特別編　1自然　2考古資料※完売しました　3美術工芸　4市民生活　5板碑　6民俗　7城館　8慶長遣欧使節
資料編　1古代中世　2近世1藩政　3近世2城下町　4近世3村落　5近代現代1交通建設　6近代現代2産業経済　7近代現代3社会生活　8近代現代4政治・行政・財政　9仙台藩の文学芸能　10伊達政宗文書1※完売しました　11伊達政宗文書2　12伊達政宗文書3　13伊達政宗文書4

◎次回刊行予定
通史編9　現代2
◎続刊予定
特別編／地域誌、年表・索引

通史編／3,000円（本体2,858円）
資料編／4,000円（本体3,810円）
特別編／6,000円（本体5,714円）
※板碑のみ5,000円（本体4,762円）
1冊ずつお求めになれます

県内主要書店、仙台市博物館ミュージアムショップでお求めになれます。
配送をご希望の方は、電話・FAXで宮城県教科書供給所へお申込みください。
発売元／㈱宮城県教科書供給所
〒983-0034　仙台市宮城野区扇町一丁目6-3
TEL:022-235-7181　FAX022-235-7183

仙台市史編さん事業の機関誌
『市史せんだい』
好評発売中！

最新刊
市史せんだい
Vol.22

◆A5判 130頁
◆定価　500円（税込）

仙台市内で救出された被災資料や震災後の蒲生・荒浜地区の地形、貞観地震に関わる論考を紹介する特集「東日本大震災と地域史の再発見」。そのほか、中在家南遺跡に関わる論文、『資料編 伊達政宗文書』の補遺、伊達慶邦筆「蘊蓄録」、戦前の仙台市財政表を、一部カラー図版を用いて紹介しています。ぜひ、お手にとってご覧ください。

仙台市博物館ミュージアムショップでお求めになれます。

※『仙台市史』『市史せんだい』に関するお問い合わせは、仙台市博物館市史編さん室へどうぞ

せんだい市史通信 第29号
発行年月日／平成25年1月31日
編集・発行／仙台市博物館市史編さん室　TEL／022-225-3074
〒980-0862　仙台市青葉区川内26　URL http://www.city.sendai.jp/kyouiku/museum

このリーフレットはリサイクルできます。「雑がみ」へ分別しましょう。